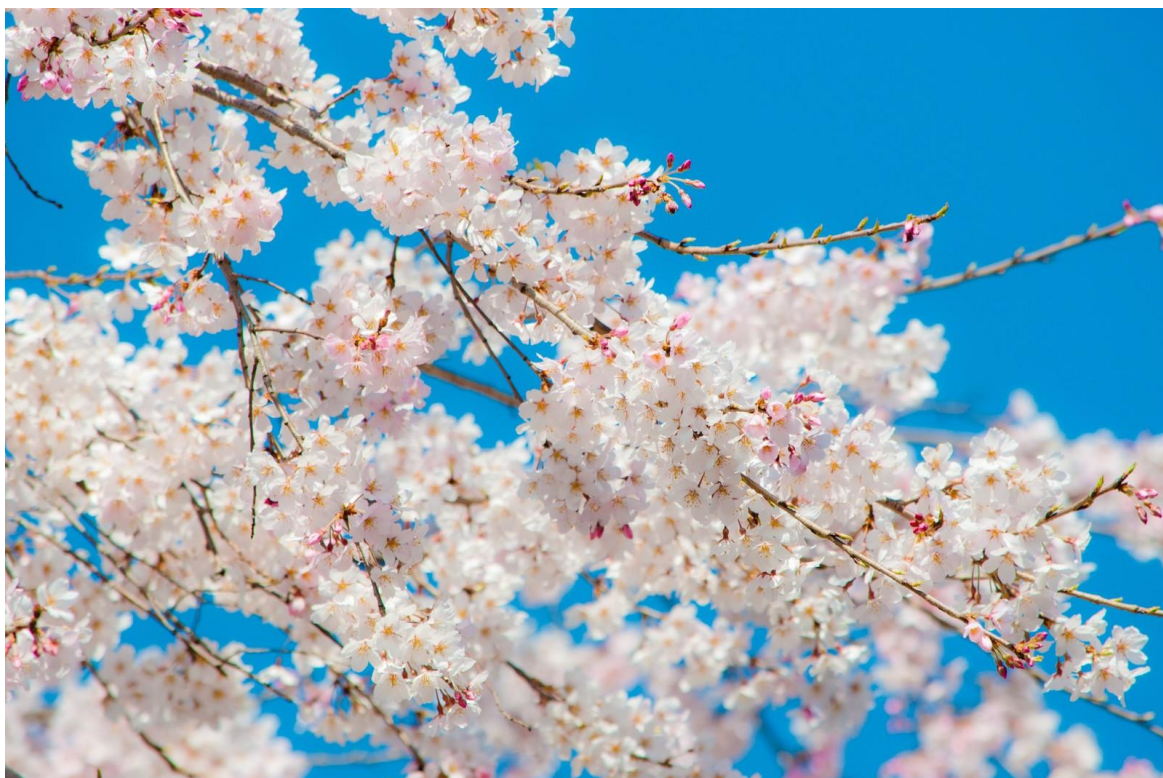


富大考古通信



第 25 号

考古学を志すきっかけ

番組冒頭、高校名の入ったプラカードをもつ女性を先頭に 47 都道府県の代表が勢いよく行進をしてくる。そう、これは夏の甲子園の入場シーン。そして、出場校が一堂に整列するやいなや、突如場面が切り換わる。巨大前方後円墳が大きく映し出されたのである。野球ファンならお馴染みの甲子園をはるかに凌ぐ大きさの古墳が、今から 1,700 年も前につくられていたことに衝撃を受けた。この時、私は高校 3 年生。繰り返し再生したために、今では VHS のビデオテープが伸びきってもう見ることはできないが、ケースの背には NHK 特集「巨大古墳のなぞ」（昭和 62 年 10 月 10 日）と書かれている。思えば、この番組が研究テーマを決める一つのきっかけになったような気がする。

少し遡って、高校 3 年の夏は国語で課された作家論の課題に苦悶し、夏休みをかけて何とか夏目漱石の作品を読破して原稿用紙数十枚の文章を書いたが、先生から激励の言葉をいただいたのはうれしかった。読書や文章を書くのが一番の苦手だったが、少しは自信がついた。調子にのって分厚い本ではあったが、本屋で偶然見かけた中公文庫のシリーズである、井上光貞著『日本の歴史 1 神話から歴史へ』や直木孝次郎著『同 2 古代国家の成立』を購入した。専門的内容で難しかったが、たくさんの遺跡や土器、古墳の副葬品などが出てきて、いよいよ大昔のことを勉強したいという意識が高まった。そんな時に見たのが冒頭の番組である。考古学という分野があることもこの頃はじめて知った。

田舎町の本屋なので考古学の本じたいほとんどなかったが、これもまた偶然見かけて次に購入したのが、浜田青陵著『考古学入門』（講談社学術文庫）であった。石器や銅鐸などの味わい深いイラストや平明な文章で、一気に引き込まれた。寝る前にこの本を少しずつ読むのが受験勉強もただ中の心のなぐさめになった。また、この本を通して、東京上野の国立博物館（東博）へ行けば発掘出土品を見ることができることも知った。分かるとじっとしてはおれず、受験勉強も追い込み期だというのに東博へ展示を見に出かけた。考古資料が展示してある東博の表慶館はドーム屋根が美しい明治期の西洋建築であった。天井が高く、大理石壁？の厳かな内部は、ちょっぴり暗くて、初冬の寒々とした空気が張りつめていた。人気のない室内は静寂で、まるで時代から取り残されたような雰囲気も好きだった。実家からバスと電車を乗り継いで片道 2 時間半はかかるので大変だったが、当時の私には実物を見ることができた感動の方が数倍勝っていた。1 日を博物館で過ごしてはまた受験勉強へむかう日が何度か続いた。

土器や石器を作った人たちは、いったい何を考えて暮らしていたのだろうか。博物館の展示を見て、銅鐸や青銅製の武器、また埴輪や鏡などのきらびやかな古墳出土品にも心を奪われたが、土器や石器を残した名もなき人たちがどのような生活をおくっていたのかということについても同じくらい興味をもった。決して裕福とは言えない自分のくらしともあいまって、著しい階層化社会であった古墳時代を生きた人々の生活文化にとりわけ関心がわいた。卒業論文で古墳時代の土器を扱ったのは、自分なりに時間軸を得るとともに、人々の生活に近い資料を扱いたいという思いが強かったからである。

さて、考古学研究室の学生の皆さんにも学問を志す動機や出来事があったことと思います。それはどんなことでしょうか。きっかけは些細なことだったかもしれませんが、初心を思い出して、自分が本当に勉強したいこと、成し遂げてみたいことへむかって一歩ずつ進んでいってください。（高橋浩二）

目次

考古学を志すきっかけ	高橋浩二
卒業論文要旨	
富山県の縄文時代における骨格製漁労具の研究	松永七星
弥生時代中期の北陸地域における管玉製作技術の研究	大上立朗
東海地方の埴輪祭祀 ～愛知県・静岡県 of 形象埴輪を中心に～	山中章太郎
飛鳥時代における富山県の横穴墓の地域性と階層性について	鳥山悦世
祭祀における富本銭・和同開珎の使用法について	辻裕哉
古代の南加賀における陶硯の研究	津田明恵
中世越中における茶道具の研究	西澤由理子
北陸地方の近世城郭における石垣の研究	浦口日捺
卒業発表会と追いコンのお知らせ	
編集後記	

卒業論文要旨

富山県の縄文時代における骨角製漁撈具の研究

松永七星

縄文時代の骨角器についての研究は、戦前から現在に至るまで多くの研究者により行われている。しかし、骨角製漁撈具は素材の性質上、遺存し得る条件が適う遺跡が限られており、その研究の多くは北海道や東北、関東地方を中心に行われている。北陸地方においては貝塚遺跡自体が少ないため、骨角製漁撈具の研究はそれほど多く行われていない。近年、富山市上久津呂中屋遺跡や富山市小竹貝塚の発掘調査が行われ、骨角器が出土した。また、それらの遺跡では自然化学分析による出土魚類遺存体の同定が行われている。そこで本論では、富山県内の遺跡から出土した骨角製漁撈具に焦点をあて、骨角製漁撈具の変遷および骨角製漁撈具と魚類遺存体の関係から、当該地域における縄文時代の漁撈の一端について明らかにすることを目的とする。

対象とする資料は、富山県上久津呂中屋遺跡と富山県小竹貝塚から出土した骨角製漁撈具（ヤス状刺突具・逆刺付刺突具・単式釣針・組み合わせ式釣針）である。これらの器種・形態・法量について整理し、出土層位から時期を明らかにすることで、骨角製漁撈具の変遷をみていく。また、報告書内で報告されている魚類遺存体に対する自然化学分析の結果を集成し、骨角製漁撈具と魚類遺存体の関係について検討を行った。

分析の結果、ヤス状刺突具は両遺跡から出土しているが形態や法量に大きな違いはなく、逆刺付刺突具は小竹貝塚から3点のみの出土であるため形態の違いは確認できなかった。単式釣針は上久津呂中屋遺跡から大型のものが、小竹貝塚から小型のものが出土しており、この大きさの違いは時期差によるものというより遺跡の立地環境および捕獲対象としていた魚類の違いによるものだと考えられる。組み合わせ式釣針は小竹貝塚からのみ出土しており、形態の違いはみられない。小竹貝塚からは単式と組み合わせ式の釣針が出土しているが、これは捕獲対象魚の種類によって使い分けていたと推測される。骨角製漁撈具と捕獲対象魚の関係について、上久津呂中屋遺跡においては、内湾性の魚類を対象とする漁法としては刺突漁と網漁が考えられるため、ヤス状刺突具による刺突漁のみの捕獲対象魚を特定することは困難であった。その一方で、外洋性の魚類はヤス状刺突具を用いた刺突漁や網漁の対象とはみなしがたいため、釣針を用いた釣漁によって捕獲されていたと推測される。小竹貝塚においては、外洋性の魚類の出土数が他の魚種と比較して少ないことから、釣針を用いた釣漁での捕獲対象魚は内湾や淡水域に棲息する魚類であった可能性が考えられる。

今回の研究では、富山県および北陸地方の骨角製漁撈具の変遷を捉えるとともに、出土した骨角製漁撈具の捕獲対象魚の違いを検討した。しかし、刺突漁のみの場合の捕獲対象魚や、小竹貝塚における釣漁の捕獲対象魚の魚種を特定することは困難であった。また、当該地域の縄文時代における漁撈を復元するためには、骨角製漁撈具を用いて行う漁撈以外にも、網漁や丸木舟などの設備との関連性等を総合的に検討する必要がある。資料の増加を待ちつつ、今後の課題としたい。

弥生時代中期の北陸地方における管玉製作技術の研究

大上立朗

弥生時代中期の北陸地方では管玉製作が盛んであり、二つの製作技法があるとされた。北陸西部の「大中の湖南技法」、北陸東部の「新穂技法」である。しかしその分布範囲は研究者によって異なり、二つの技法の定義に当てはまらないような資料も確認されている。本研究では従来の技法の定義を用いずに、北陸地方の管玉製作技術の地域性の解明を試みる。

対象地域は北陸四県である。筆者は福井県下屋敷遺跡、石川県吉崎・次場遺跡、東的場タケノハナ遺跡、富山県江尻南遺跡、石塚遺跡、石名瀬 A 遺跡、新潟県平田遺跡、蔵王遺跡の管玉関連資料の調査を行い、猫橋遺跡、八日市地方遺跡、野本遺跡、吹上遺跡、下谷地遺跡の報告で既に提示されたデータと比較した。

管玉製作技術の地域性を解明するために着目した点は次の三点である。まず最終施溝分割をヨコ割りとするのか。タテ割りとするのかという取り方、次に施溝分割手順、そして側面剥離である。

分析の結果は以下の通りになる。八日市地方 7 期前半以前は羽咋市以東の遺跡が少なく、管玉製作技術の地域性を確認できなかった。ただし富山県に位置する江尻南遺跡の施溝分割手法は八日市地方 7 期後半以降の施溝分割手順は次段階につながる手法であることが確認できた。

八日市地方 7 期後半以降、羽咋市以東の遺跡が増加することで北陸地方内での比較が可能となり、管玉製作技術と翡翠製半球形勾玉には明確な地域性が認められた。まとめると次のようになる。

- ①白山市以西はヨコ割り、タテ割り併用、羽咋市以東はタテ割りを主体的に行う。
- ②施溝分割の際の打面転移、言い換えると施溝分割手順について、八日市地方 7 期後半以降、タテ割り主体の羽咋市以東では、江尻南遺跡の施溝分割手順 I b2→III2 をさらにタテ割りに特化させた III2→III2 が共通して採用される。白山市以西の 4 遺跡で共通する施溝分割手順は無かった。しかし八日市地方遺跡と下屋敷遺跡では III1→I a1 が共通する。
- ③羽咋市以東では基本的にタテ割り後、側面剥離という順序であって、ヨコ割り後に側面剥離を行うのは稀である。対して白山市以西の下屋敷遺跡、八日市地方遺跡ではヨコ割り後、側面剥離を行うのは一般的である。
- ④翡翠製半球形勾玉にも管玉製作技術と同様の地域性が見られる。白山市以西の下屋敷遺跡、八日市地方遺跡では緑色で、背部は丸みを帯び、腹部の抉りが深い。それに対し羽咋市以東では白色で、背部は稜が残り、腹部の抉りが浅い。

上記で述べてきた管玉製作技術の地域性形成の背景には碧玉原産地に左右される人々の動き方の違いがあると考えた。白山市以西では、八日市地方 7 期前半以前から那谷・菩提産の碧玉を用いていた。羽咋市以東では白山市以西と比べて玉作の期間が短い遺跡が多く、これは羽咋市から佐渡市にかけて、技術的系統を同じくする人々が短い期間で拠点を移しながら管玉製作を行ったことを示すと考える。

東海地方の埴輪祭祀 ～愛知県・静岡県の形象埴輪を中心に～

山中章太郎

円筒埴輪の研究や近畿・関東地方における形象埴輪の研究は昔から盛んに行われてきた。しかし、近畿地方から関東地方への文化の伝播ルートの一つである東海地方の形象埴輪の研究はあまり行われていないように思われる。そこで本研究では愛知県（尾張・三河）と静岡県（遠江・駿河・伊豆）の形象埴輪が出土した古墳とその形象埴輪を対象とし、形象埴輪の種類がどのように変遷し、どのような埴輪祭祀が行われていたかを明らかにすることが目的である。

対象とする資料は尾張・三河・遠江・駿河・伊豆の形象埴輪が出土した古墳である。なお、尾張・三河・遠江に関しては時間的制約や資料の不足等から全てを集成することはできなかった。これらの資料の形象埴輪の種類や時期、どのように配置されていたか、古墳がどの位の規模であったかを分析した。なお、時期に関しては和田編年を基にした本研究独自の編年を採用している。

分析の結果、尾張・三河・遠江は4期から形象埴輪を採用し、4～7期までは家形・器財埴輪を中心とした聖域の区画や被葬者の威信を示す埴輪祭祀を行い、8～10期は人物・動物埴輪を中心とした何らかの祭祀や生前の被葬者を表現した埴輪祭祀へと変化したことが分かった。尾張では7期と10期に埴輪祭祀が盛んになり、三河・遠江では7期と9期に埴輪祭祀が盛んに行われた。一方、駿河・伊豆は埴輪の採用自体が低調な地域で、埴輪祭祀が開始されたのは9期からであり、時期による差異はあまり見られない。駿河の場合は西側の古墳は種類が比較的多く、器財・動物・人物埴輪を採用していたが、東側では人物埴輪のみを採用していた。伊豆では時期等による差異は一切なく、いずれの古墳も馬形・人物埴輪のみを使用し、盾持人で外周を巡らし、その内側に馬形・人物埴輪を並べていたようである。

埴輪の配置場所は造出・墳頂・中段テラス・墳裾・周溝外側の周堤などに配置されていた。古墳の規模と形象埴輪の種類数には比例関係が見られなかったため、古墳の規模が小さくても、被葬者が畿内の勢力との結びつきが強ければある程度形象埴輪を多めに使用することが許可されていた可能性がある。

今回の研究では前述したとおり、一部の地域で扱っていない古墳があり、特に尾張ではごく一部の古墳しか取り扱っていないため、今回取り扱わなかった古墳も含めた検討が必要である。また、今回は地域ごとの形象埴輪の変遷は調査したが、形象埴輪の種類ごとの変遷は調査していないため、後者の変遷を加えた研究も必要である。以上を今後の課題としたい。

横穴墓とは崖面に穴を穿って造られる墓であり、古墳時代以降は群集墳の1つとして多く造られていた墓である。古くから横穴墓は研究の対象とされてきたが、近年では地域ごとに詳しく構造の型式を分析する研究が多い。しかし、富山県では多くの横穴墓が所在しているものの、遺物の散逸や崩壊が著しいことから、研究は十分ではない。また、被葬者自身について言及した研究も少なく、長い間庶民の墓だという理解であった。

そこで、富山県の横穴墓に焦点を絞り、その構造や規模から富山県の横穴墓の地域性を見出していく。次に被葬者の階層性について遺物や周辺の古墳との関連も踏まえながら言及していく。さらに、本当に庶民の墓であるのかということについても述べていく。

対象とする遺跡は、富山県で特に横穴墓が集中している呉羽地区から番神山横穴墓群・金屋陣の穴横穴墓群、小矢部川左岸の丘陵地区から院内東横穴墓・頭川城ヶ平横穴墓群・江道横穴墓群・城ヶ平横穴墓群・加茂横穴墓群・桜町横穴墓群、氷見地区から坂津横穴墓群・加納横穴墓群・阿尾城山横穴墓群・阿尾瀬戸ヶ谷内横穴墓群・藪田薬師横穴墓群・脇方横穴墓群をとりあげる。分析は、遺物から時期を判断した上で平面形・天井形・規模に着目し、地区内での横穴墓築造の流れや系譜関係を明らかにし、地域性について考察する。次に被葬者については、横穴墓の規模と副葬品に着目し、そこから被葬者の性格や地位を考察する。

分析の結果、呉羽地区の地域性として縦長形・アーチ形が多く、どれも同じような規模におさめていることがわかった。この縦長形は北部九州にて初現した形であり、そこからの伝播の可能性は高い。被葬者については、墓域を共有している呉羽山古墳を首長とし、その系譜にいずれの遺跡も属していると考えた。遺跡内での階層差は、同様な規模にしていることからあまりないと考える。小矢部川左岸の丘陵地区は①縦長形・アーチ形・小規模、②多種類であるが、出雲系である横長形が多い・ドーム形・大規模、③2と同様・アーチとドーム形・同じような規模、の三つの地域性が見られた。階層性としては、横穴墓築造のきっかけとなった首長の人物や中央政権との関わりをもつ人物の可能性があったことから、庶民の墓であるという見解は当てはまらないと考える。氷見地区は、方形を主体としつつも多種類・アーチ形とドーム形・小規模から大規模なものがあった。縦長形や横長形も見られたがかなり混在しており、時期も不明なものも多く、北部九州・出雲いずれの伝播なのかは不明であった。しかし、富山県では一番多くの横穴墓が所在している氷見地区で、天井形の種類が少ないことは大きな特徴である。被葬者に関しては規模の大小で階層性をあらわしているのではないかと考える。特に加納横穴墓群では、墓域を共有している古墳時代前期から造営が続く蛭子山古墳群との関わりの可能性は高いと考える。

しかし、本論では北部九州・出雲からの伝播の過程まで明らかにすることができなかった。これは、富山県だけでなく、日本各地域の横穴墓を総括的に研究していくことが必要であり、どのような経路で富山県に伝播したのか、今後明らかにしたい。

現在の貨幣は、モノの交換価値を表し、モノを交換する際の媒介物として用いられている。古代貨幣も現在の貨幣と同じ役割があったと考えられている。故に古代貨幣では流通経済の観点からみた研究が多い。しかし、『延喜式』などの文献資料から、古代日本において貨幣は、祭祀遺物としての価値もあったと考えられている。本研究では、祭祀の面で古代貨幣がどのように用いられていたのかを明らかにすることを目的としている。

対象資料は、藤原京と平城京から出土した富本銭と和同開珎である。藤原京では2017年までに富本銭が13枚、和同開珎が76枚出土している。平城京では2017年までに富本銭が2枚、和同開珎が合計1069枚出土している。これらの資料をもとに、出土状況・時期変遷に伴う出土枚数の変化・共伴遺物・出土位置といった観点から分析を行った。

分析の結果、共伴遺物の観点では各遺構別に特定の意味合いを持った祭祀遺物が出土するなどの特色が見られた。また、いずれの遺構においても全体に占める割合の中で、皇朝十二銭の割合が大きい。これは、祭祀遺物とともに、貨幣を埋納することに意味があったからだと考えられる。当時貨幣には経済的価値もあったため、価値のあるものを祭祀遺物と共に埋納し、祭祀の重要度を強める意味合いがあったのではないかと考えられる。出土位置の観点では、長屋王邸周辺、平城京右京八条一坊付近の両地区に出土例が固まっていることが明らかになった。長屋王邸周辺地区の出土例が多い理由の一つとして、長屋王が当時の左大臣であり、権力者であったことが挙げられる。当時の権力者の長屋王の邸宅に富として莫大な数の和同開珎が蓄えられ、祭祀にも用いやすかったため、出土例が多いと考えられる。だが、この推論は長屋王が存命時の話であり、長屋王が亡くなった後も出土例が多くあるため、考察の余地がある。平城京右京八条一坊付近の地区の出土例が多い理由は、この地区の近くに西市があったからだと推測できる。西市に流通貨幣として大量の和同開珎が回ったことで、出土例も多くなったと考えられる。時期変遷に伴う出土枚数の変化の観点においては、規則性などはなく、藤原京・平城京の時代では時期変遷による祭祀の特質の変化や、枚数の増減といった変化は見られないということが明らかになった。これらの結果から、榮原氏が『日本古代銭貨流通史の研究』（榮原 1993）で提唱していたように、古代人は銭貨を埋納することによって、各遺構に意味合いを持たせていたことが明らかになった。

今回集成した古代貨幣の中で出土数が最も多かった遺構は溝であるが、溝に対する古代貨幣の祭祀的使用方法については榮原氏も考察しておらず、研究も進んでいない。溝に対する貨幣を用いた何らかの祭祀が行われていた可能性が高く、考察の余地がある。また、本稿では、限られた地域の限られた貨幣を対象としたため、今回扱わなかった地域や貨幣も対象にし、より精密な分析をすることが今後の課題である。

飛鳥・奈良・平安時代に広く生産および使用された硯として、須恵質の陶硯を確認することができる。遺跡での陶硯の発見は、貴族、役人、僧侶など識字層の人々が出土地に関わっていたことを示し、遺跡の性格の推定に寄与するとされている。

陶硯に関する研究史を紐解いていくと、次のようなことが明らかになった。内藤政恒氏が『本邦古硯考』で中国と朝鮮半島、我が国において出土した古代の陶硯について考古学的に検討して以来、多くの研究者により、全国のさまざまな地域を対象として陶硯の考古学的研究が行われてきた。北陸地方においては、吉岡康暢、望月精司、田中広明諸氏をはじめとする面々が検討を進めてきたようであり、陶硯を用いて流通や識字層のあり方などを探ることができると認識されている。

立国の遅かった加賀を擁する石川県に着目すると、陶硯について十分な集成が行われていないと思われた。そこで、北陸最大の須恵器窯跡群である南加賀窯跡群付近でどのように陶硯が盛衰したのかとの観点から、石川県の南端から現在の手取川中流域を延長した線までの範囲に位置する9遺跡に焦点を当て、検討を行った。

転用硯と猿面硯を対象から外して集成を実施し、山中敏史氏が『陶硯関係文献目録』中で示した陶硯の型式分類に基づき、集成によって得られた61点の資料について分類を行った。すると、円面硯が38点、風字硯が23点であった。前者の内訳は、圈足硯37点（筆立て付1点を含む）、中空円面硯1点である。後者の内訳は、二面硯6点、その他の風字硯17点である。

次に、これらの資料について年代を7世紀代、8世紀代、9世紀代、10世紀代に区分し、編年、分布、遺跡の性格とのかかわりについて検討した。具体的には、最も南に位置する遺跡から順に遺跡番号を、各遺跡からの出土陶硯に通し番号をふり、縦軸に時間、横軸に遺跡を配置した編年図を作成した。

その結果、円面硯から風字硯へと主体が移る傾向を改めて確認することができた。最も早い段階の風字硯は9世紀後半から10世紀前葉ころに現れたと、読み取ることができたが、9世紀前半以前に南加賀に風字硯が出現した可能性も否定できない。全体の傾向として、陶硯の普及した初期には南加賀の中央部に陶硯が流通し、10世紀にかけて南加賀の南部と北部に広がっていった様子も読み取ることができた。また、遺跡の性格に関して、早い時期に、特殊手工業生産の行われる集落——製鉄および製陶に関わる人々が集住したと考えられている——に陶硯が現れ、時代を追って須恵器窯跡、寺院の順に資料がみられると示すことができた。

検討に際し、手取川扇状地などにおける人々の活動の変遷を考慮することにより、今回の検討の行き届かない点を多少なりとも補うことができると考える。

2018 年度卒業論文
中世越中における茶道具の研究

西澤由理子

中国からもたらされた飲茶文化は 16 世紀に千利休によって日本独自の茶の湯として大成され、今日に至るまで多くの人々に嗜まれている。現在では文献資料や遺跡で発見された遺物をもとに全国的に広く茶の湯に関する研究が行われているが、地域ごとの研究はまだ十分に行われていない。

北陸における茶道具の研究としては、2005 年に北陸中世土器研究会が「中世北陸の茶道具」というテーマに沿い、中世北陸における茶の特質や普及について地域ごとに研究されている。本研究では、2005 年の研究の中で高梨清志氏らがまとめた越中の茶道具の研究をもとに、村田珠光の侘茶に始まり、武野紹鷗、千利休へと受け継がれ完成する「茶の湯」文化の流れに沿い、15 世紀～16 世紀の富山県内の茶の湯の動向を探るべく、遺跡から出土した天目茶碗や茶入などの茶道具を取り扱い、県内で使われた茶道具の傾向について確認することを目的として研究を行った。

対象遺跡は、2005 年の研究で取り上げられた、当該期を中心時期とする城館 14 遺跡（木舟城跡、井口城跡、壇ノ城跡、増山城跡、針原東遺跡、白石遺跡、下村加茂遺跡、安田城跡、友坂遺跡、水橋金広・中馬場遺跡、願海寺城跡、仏生寺城跡、弓庄城跡、松倉城跡）と城下町 5 遺跡（石名田木舟遺跡、木舟北遺跡、開禱大滝遺跡、増山遺跡、鹿熊三枚田遺跡）の合計 19 遺跡を取り上げ、2005～2018 年度までに調査された遺跡の報告書を新たに加えて、遺跡ごとの茶道具の傾向を調査・分析した。

分析では遺跡ごとの茶道具の器種構成と器種別割合、茶道具出土数/調査面積で示す出土頻度（%）を割り出し、茶道具の傾向を明らかにした。

分析の結果、対象とした 19 遺跡のうち、前研究と変化があったのは 10 遺跡（石名田木舟遺跡、開禱大滝遺跡、増山城跡、増山遺跡、白石遺跡、下村加茂遺跡、友坂遺跡、水橋金広・中馬場遺跡、願海寺城跡、弓庄城跡）で、調査面積の増加や新たな茶道具の出土が確認できた。残りの 9 遺跡（木舟城跡、木舟北遺跡、井口城跡、壇ノ城跡、針原東遺跡、安田城跡、仏生寺城跡、松倉城跡、鹿熊三枚田遺跡）に関しては今回確認できた新たな発掘調査報告書がなく、2005 年とほぼ同じ結果となった。県内の全体の傾向としては、茶道具はほとんどが瀬戸美濃製品で、その中でも天目茶碗が 8 割弱を占めている傾向が確認できた。

今回の研究で、富山県内では当該期の喫茶において瀬戸美濃製品が使われる傾向にあることが確認できたが、全国的な比較検討をすることでより茶道具を扱った茶の湯の動向を確認できると考える。周辺の地域や全国的に傾向を確認することを今後の課題としたい。

近世城郭の成立の重要な要素のひとつである石垣は、個々の石の大きさや加工の状態、基本勾配や反りの量などの違いによりさまざまな形状を示している。これらの構築技術は中世後期から近世に発達し、さまざまな時代の特徴が残されている。北陸地方においては、金沢城は多種多様な石垣を見ることができる。本研究では、金沢城を含め北陸地方全体で見た近世城郭の石垣について、全国的な城郭石垣との相違や変遷について明らかにし、当該地域の石垣普請技術について明らかにしたいと考えた。

金沢城については石垣の編年が行われており、研究が進んでいるが、北陸地域全体としての石垣の編年はなされていない。石材・石切丁場については、金沢城は使用石材・石切丁場について、富山城・高岡城は石材・採石地についての研究が行われている。これらの城郭と北陸地域の他城郭の石垣石材について分析・比較する必要がある。これらの点から本研究では、石垣の積み方について分類をし、金沢城との比較を行う。そして施工の年代的検討をふまえて各城郭石垣の全体的な編年を行う。さらに北陸地域の城郭の石垣石材についても分析・比較する。そして北陸地域の石垣の特徴について考察する。

研究対象の遺跡は、北陸地方において石垣が遺構として存在する近世城郭(安土桃山時代頃～江戸時代)とする。富山県は富山城・高岡城、石川県は金沢城・鳥越城、小松城、福井県は丸岡城・福井城・大野城・小丸城・小浜城の10城である。

分析の結果、富山県の石垣は、加工はあまりなされていないものの、布積み・乱積みなど多様な積み方がみられ、石垣加工技術はある程度発達していたと考えられる。石川県は切石を使い積み上げられたものが多く、技術の発達は北陸地域のなかでも著しいものであったと考えられる。福井県は自然石による乱積みが多く、ほとんどの城郭が石垣構築技術は初期のものが多いと考えられる。石材の面では富山県・石川県は複数の石材を組み合わせており、デザイン性を考慮したと考えられる。福井県の城郭は使用石材の種類は少なく、防御性を重視して建てられた城郭が多いと考えられる。石垣編年からは北陸地方の石垣は編年初期に集中していることから、石垣技術の発展等に遅れはないものの、後世に新設・改修が行われていないため多様な変化が現れていない可能性がある。北陸全体の石垣構築技術は、富山県・石川県と福井県の城郭石垣の間には技術の発達の違いがみられ、福井県の石垣普請には富山県・石川県の城郭と異なる技術を持った人々がかかわっていたと推測できる。

今回の研究により、北陸地方の近世城郭の石垣は、各城郭により少々技術の違いはあるものの、全国的な城郭石垣と同様の時期に変遷・発展を遂げていることがわかった。そのなかでもやはり金沢城は石垣の多様性があり、北陸全体で比較しても高い技術をもって建てられた城であると言える。一方で、石垣の時期編年の検討については刻印・勾配などの点からの検討は行っておらず、十分な分析であるとは言えない。また、福井県の城郭については十分な資料を集めることができなかつた。今後の課題としては、石垣になされている刻印・勾配など多角的に検討をすることが挙げられる。

平成 30 年度富山大学考古学研究室卒業論文発表会

日時：2019 年 3 月 2 日（土）13 時～

場所：富山大学人文学部 1 階 第 3 講義室

当日のスケジュールは以下の通りです。（順番が入れ替わることがあります。）

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がございましたら 076-445-6195（富山大学考古学研究室）もしくは
tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【卒業論文】

- | | |
|------------------------------|-------|
| ①富山県の縄文時代における骨格製漁撈具の研究 | 松永七星 |
| ②弥生時代中期の北陸地域における管玉製作技術の研究 | 大上立朗 |
| ③東海地方の埴輪祭祀 ～愛知県・静岡県形象埴輪を中心に～ | 山中章太郎 |
| ④飛鳥時代における富山県の横穴墓の地域性と階層性 | 鳥山悦世 |
| ⑤祭祀における富本銭・和同開珎の使用法について | 辻裕哉 |
| ⑥古代の南加賀における陶硯の研究 | 津田明恵 |
| ⑦中世越中における茶道具の研究 | 西澤由理子 |
| ⑧北陸地方の近世城郭における石垣の研究 | 浦口日捺 |

追い出しコンパのお知らせ

春一番が吹き、寒さも和らいできました。

さて、富山大学考古学研究室では、3月2日（土）の卒業論文発表会の後に追い出しコンパを開催します。ご多忙中かと思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月2日（土）

場所：一次会…暖座クラシック富山駅前店 時間 18時～20時 会費 5000円

※参加を希望される方は tomidai_kouko@yahoo.com.jp までご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後する場合がありますので、ご了承ください。

※二次会は当日の人数により決定します。場所は未定です。

一次会の場所については、以下の地図をご覧ください。

一次会 暖座クラシック富山駅前店



編集後記

まだまだ寒さが厳しいですが、このところ日が長くなったように思います。

2月も後半に入り、わかれの季節をむかえようとしております。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。発表にむけて努力する先輩方の姿を見て、私たちの今後を重ね、いっそう身が引き締まる思いでございます。これからのご活躍をおいのりしております。

さて、この春からまた新入生が入ってきます。彼らとともに楽しく学んでいけるように一同頑張ってまいります。

(尾関さゆり)

富山大学通信 第二十五号

配信日 2019年2月

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

メール tomidai_kouko@yahoo.com.jp

※メールにつきましては、迷惑メールと識別するため、タイトルには必ず「富山大学考古学研究室」と入力してください。ご協力お願いいたします。